

ガボンの稲作

ネリカ米生産性向上専門家としてガボン共和国で4ヶ月ほど業務を行った。ガボンは中部アフリカの西海岸に面した赤道直下の国。西は大西洋、北を赤道ギニアとカメルーン、東と南はコンゴ共和国と接している。短波ラジオで「ラジオ日本」の国際放送を聞いていた人ならば、電波を中継する「アフリカ、ガボンのモヤビ送信所」という名前に聞き覚えがあるだろうし、1952年にノーベル平和賞を受賞したシュ

バイツァー博士が密林に病院を開いた街、ランバレネがガボンにあることを知る人も多いかもしれない。私自身は、JICA 筑波で「稲研究コース」の研修指導を担当していた2002年にガボン人研修員を受け入



モヤビ送信所の巨大アンテナ。現在ラジオ日本の中継には使用されていない。

れた経験があり、その研修員から、「現在、米の生産はないが、2,000mmを超える雨量など、ポテンシャルがある国なので、ぜひ、JICAに稲作技術の支援をして欲しい」という話を聞いていて、印象に残っている国であった。

ガボンの国土は26.8万km²と日本の本州程度であるが、人口が148万人であり、人口密度が非常に低い。国土の80%は森林で、人口の85%は都市部に集中しているため、農村部の人口密度はさらに低い。資源が豊富で特にGDPの35%を占める石油産業に依存した経済となっている。農業生産は極めて低く、食料供給を輸入に大きく依存しており、野菜の多くは隣国カメルーンからの輸入という。

ガボン人の主食は食用バナナとキャッサバであるが、都市部を中心に米の消費も大きく、一人当たり年間37kg程度食べている。過去に、灌漑水田開発プロジェクトがいくつか実施され、合計1,000ha程が開発されたが、米生産は持続せず、現在も全てが輸入である。近年、ガボン政府は産業多角化、農村開発と食糧安全保障の観点から、米生産を優先的に取り組む課題とし、陸稲の導入と水田のさらなる開発に取り組んだ。私の配属された農村開発公社(ONADER)では、2009年から3年間の予定で、アフリカ稲センターの指導のもと陸稲・水稲ネリカの参加型品種選定(PVS)に取り組み、これまで2年間の実績を積んできているが、職員も協力農家もまだ経験が十分でないため今回

は、ONADER職員に対する品種比較試験実施の指導や農家研修などを中心に業務を行った。

ガボンの農家は熱帯雨林の森を切り開き、居を構え、主食にキャッサバやバナナを栽培し、蛋白源としてヤマアラシなどの野獣を罠で捕ったり、川で魚を捕ったりして暮らしている。家畜も少



森の中の陸稲圃場

なく、村では僅かにヤギやニワトリを見かける程度。穀物の栽培や牛・豚の飼育は一般的ではない。カウンターパートによると、「キャッサバやバナナの苗を植えるには穴を掘るだけでよく、農家はほとんど土に触れない。」のだという。少し大げさな表現だが、何年も継続して栽培している開けた畑地を見かけないのも事実である。PVSの協力農家も森や草原を切り開いて陸稲を栽培していた。森の中の圃場は、日照不足であったり、集中的に鳥害、獣害を受けたりするケースが多かった。一年性穀類の栽培経験が少ないから、雨季に基づく作期の概念が明確でないと感じる場面も多かった。

このようなガボンの農家に陸稲栽培を普及するには多くの困難が予想されるが、研修を実施し、農家と議論してみると稲作に熱意のある人が多く、独自の技術や工夫があることが分かった。例えば、播種後の圃場にヤシの葉を置くことによりニワトリの食害を防ぐ伝統技術を実践する農家や、防獣柵の素材を工夫する農家、さらには、初めて稲を栽培したのにもかかわらず、臼と杵で精米を行った農家もいた。

政府は、元副大統領が引退後に地元で大規模機械化陸稲作に取り組んでいる事例を意識し、各州で5haの陸稲展示栽培を行うようONADERに指示したり、アフリカ開発銀行の協力を得て、3,500ha程の水田開発にも取り組みだしたりと、ハード先行の稲作開発を進めている。しかし、独自の技術を持つ小規模な農家と向き合いながら、基礎的栽培技術の課題に取り組むアプローチも不可欠である。

日本大使館とJICA支所はネリカ品種の導入時から稲作支援に関わってきており、ガボン政府の日本への期待は大きい。また、冒頭に紹介したJICA筑波の元研修員が、その後、日本へ留学し、農学博士となって私の在任中の4月に帰国し、ONADER総裁のアドバイザーとして働き始めた。日本が稲作技術の基礎固めを支援する環境が整ってきている。

(2011年8月小島)